

研究の概要

研究主題

子どもが自らの世界を拓く学習

～探究し続け、新しい自分にであう生活科・総合的な学習の時間をめざして～

1 研究主題設定の理由

子どもは自分を取り巻く様々な環境から刺激を受けたり、環境に働きかけたりしながら、自分の世界を創り、拓き、よりたくましく心豊かに成長していくものと考えている。そのような子どもの成長をめざす教育活動は、目の前の学習対象に課題意識をもち、今持っている力を駆使し仲間と共に解決しようと切磋琢磨する子どもの姿が見えるものでなくてはならない。

子どもの実態はというと、素直で与えられた課題に向かって真面目に取り組むことができ、身近な自然や初めて出会う人、目新しいことには興味を示すが、それらを媒介にして問題意識をもち、仲間や地域の方とかかわり続けようとする姿は見えにくい。また、どの子どもも課題意識をもち、解決までの過程を楽しみ、手ごたえを感じて学習を行っているかという疑問の余地が残る。

私たちは、このような子どもたちが、身近な対象に興味・関心をもち、仲間や様々な人とかかわりながら共に学び合うことを通して、課題解決に向けて意欲的に学習し、達成感や満足感を味わってほしいと願い、平成5年の本校開校以来、子ども主体の学習の在り方について研究を続けてきた。そこで、「自らの世界を切り拓こうとする主体的・創造的な子どもを育成する」を教育目標のもと、「子どもが自らの世界を拓く学習」を研究主題とし、平成17年度からは生活科・総合的な学習の時間を中心に、目の前の子どもとともに生活の中から問題を見出し、「つきたい力」を明確化することによって、探究的な学びをめざす教育実践を行っている。

〈教育目標を達成するための具体的なめざす子ども像〉

追究する子ども

様々な教育活動の場で自分から課題を見つけ、課題解決に向け仲間と共にねばり強く取り組む姿

自己を見つめられる子ども

課題解決の過程で自分と仲間の思いや考えを比較・考察し振り返る姿

共に伸びる子ども

独り善がりな学びではなく、かかわる全ての人たちと共に高まり深まり合う姿

研究主題のもと、教育目標を達成するための具体的なめざす子ども像に迫るには、子どもたちが実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析し、まとめ・表現することができるようになる。つまり、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行い続ける姿の実現をめざすことが必要と考える。

また、探究的な学習を通して、学習材との距離が縮まり、自分ごととして考えるようになったり、社会の一員である意識が生まれたり、本物の探究につながっていく自己の新たな一面や、過去の自分との変容に気付いたり、自己の生き方を考えたりするようになる姿の実現も不可欠であると考えます。

これらの姿を具体的に実現していくため、研究サブテーマを、「探究し続け、新しい自分にであう生活科・総合的な学習の時間をめざして」と設定した。

2 「探究し続け、新しい自分にであう」とは

本校が考える、「探究し続ける」とは、「探究過程の中で、子どもが主体性を発揮し、対象や活動に対して関心・意欲を高めつつ、本気になって仲間と共に追究する姿が繰り返されること」ととらえる。

探究過程について、総合的な学習の時間では、図1に示されるように、「課題の設定」→「情報の取

図1 探究的な学習のイメージ図

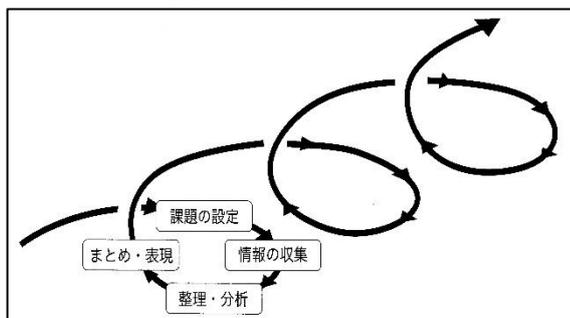
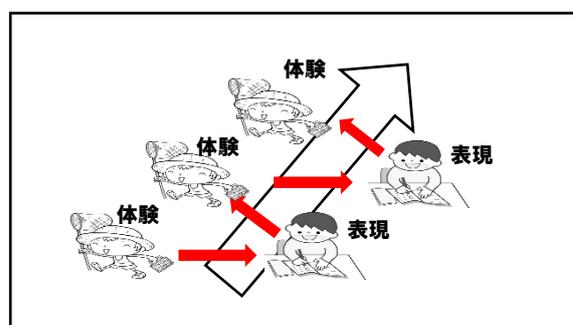


図2 体験と表現のイメージ図



集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」の4つの探究プロセスの中で行われる問題解決的な活動が、発展的に繰り返されていくものととらえる。生活科では、図2のように、「体験」と「表現」を繰り返しながら、その間で思考することを大切にすることで、それぞれの質が高まっていく学習過程を大切にしている。

次に、「新しい自分にであう」とは、探究過程の中において、

- | | |
|-----------------|----------------|
| ①対象への気付き・理解の高まり | ②ものの見方や考え方の広がり |
| ③次の活動への意欲の高まり | ④自分自身の成長 |

があり、それらを子ども自身が実感することととらえる。単元前に無自覚だった関心や疑問を子ども自身が自覚し、他者と協同して課題を解決しようとする学習活動(助け合う・学び合う・高め合う)を通して、次のような子どもの姿が見えてくると考える。このような子どもの姿が一人一人の成長であり、子ども自身が実感することで新たな学習意欲につながり、学習が高まり深まっていく。

- ◇自分の考えをしっかりともち、他者と話し合う姿
- ◇自分とは違った考えを受け入れる姿
- ◇他者と協力して身近な課題解決に主体的に取り組む姿
- ◇他者、社会、自然・環境とかかわりを持ち、共に生きようとする姿

3 研究主題に迫るための手だて

(1)「探究し続ける」ための単元構成について

本校では、学級担任一人一人が学級独自の年間指導計画（マイカリキュラム）を作成し、各教科等との関連を意識しながら、目の前の子どもを大切に、子どもの思いやこだわりからスタートする学習、生活の場である地域素材を生かした探究的な学習・問題解決学習を軸に、授業研究、教材研究に努めてきた。

単元構成について、生活科では、年間授業時数（1年：102時間、2年：105時間）を、学習指導要領に示された9つの内容をもとに単元構成を行い、具体的な活動や体験を通して、身近な人、社会、自然とのかかわり、自立への基礎を養うことに取り組んでいる。

総合的な学習の時間では、年間授業時数（70時間）の中で、学級独自の単元構成を行い、各学年で設定した育てたい資質・能力の育成に向けて取り組んでいる。

また、本校では、生活科・総合的な学習の時間において、年間・単元を通して中心となる学習対象（もの・こと・ひと）が、単元を通して学ぶ価値がある「学習材」となりうるかどうか、次のような点を大切にしながら、教師が精査し、単元構成を行っている。

①子どもの興味・関心を探る

学習材に対する興味・関心が薄いと、子どもたちの意欲が続かない。興味・関心を探り、それに沿った学習材を設定することが不可欠である。子どもたちが自分から朝の会や終わりの会で生活・総合の学習に関連することを話すようになることが理想であるが、それを待っていても自然とそうなるわけではない。休憩時間、掃除中、給食時、など授業中以外の学校生活の中で、子ども同士で話したり、教師に伝えたりする瞬間がある。そんな瞬間を逃さず、「朝の会で他の子に伝えてよ！」と声掛けすることで、一人の言葉がみんなのものになったり、一人の疑問がみんなのものになり、追究が始まるきっかけにもなったりしうる。

また、単元が始まる前の作文から、教師が取り上げたい話題を全体に投げかけることができる。単元をスタートさせた後では、単元の学習に関連する内容の文章を書く子が現れ、その子の考えていることや疑問に思っていることを全体に投げかけ、話し合ったり追究したりすることにつなげることができる。

②1年間の学習を複数の小単元で構成

年間70時間の総合的な学習の時間を、いくつかの小単元で構成し、それぞれにおいて、「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」の一連のプロセスをスパイラルさせていく。このように小単元を設定することにより、子どもたちの学習材に対する関心・意欲、学習方法に関する力などを少しずつ高めながら、探究的な学習サイクルがスパイラルに深まっていくことを意識して取り組むことができると思う。

また、小単元ごとに目標を設定することにより、単元の見通しをもって、子どもたちに育てたい資質・能力をより明確に設定したり、次の学習に向けて、活動や目標の修正もしやすくなったりすると思う。

③人とのかかわり、人の生き方に迫る

子どもたちが課題解決のために追究をする中で、情報収集手段として単発的に人とのかかわるだけでなく、継続的にかかわりながら、その人の取組に対する思いや願い、その人の生き方に迫り、子どもたちの学習への意欲を高めることにつなげたい

④地域とかかわり、社会の思いや願いに迫る

子どもたちが生活している地域（六十谷、有功地区、和歌山市…）の人・もの（場所）・ことと関わったり、地域を学習の成果の発信する場として活用したり、大人でも解決できない地域の問題、課題に迫る

ことにより、地域にかかわる人々の思いや願いに迫ることができる大きな機会になるとともに、地域の一人として、子どもたちが社会参画していくことにつながったり、子どもたちなりに地域に貢献し、多くの人々からその活動を認められ、子どもたちの自己肯定感や自己有用感を高めることにもつながったりする。

⑤意図的, 効果的な体験活動の位置付け

どうしてこの時期にここへ見学に行くのか、なぜこの活動を入れたのかということを考えたり、単元の流れや児童の興味・関心を考慮したりしながら、意図的に体験活動を位置付けていく。そうすることで、子どもの課題発見や課題解決につながったり、子どもの活動に対する関心・意欲をさらに高めたりするような、効果的な体験活動になると考える。

(2)「新しい自分にであう」ための工夫や支援について

子どもたちが探究的な学習を通して新しい自分にであうために、単元や1時間の授業の後に意味ある振り返りをするのが大切である。そのためには、単に振り返りの方法だけを考えるのではなく、1時間の授業の前と後で、子どもの思いや考えに変容が期待できる授業を構想しないといけない。そこで、次のようなことを大切に、それぞれが互いにつながり合い、「新しい自分にであう」子どもの姿の実現をめざしている。

①子どもたちが本気になる課題設定

子どもたちが本気になって調べたり話し合ったりできるように、教師は子ども一人一人の考えを把握し、それらをもとに課題を設定することをこころがけている。その手だてとして、子ども一人一人の考えを把握するために、それらを座席表にまとめ一覧表にしている。

②子どもの考えや情報を膨らませる

授業に至るまでに、教師は子ども一人一人に助言をして考えを深めたり、課題解決に向けての情報収集を促したりして、子どもの考えや思いを膨らませ、より本気になって話し合いに臨めるようにしている。

③話し合いの充実と振り返りの工夫

そして、子どもたちがそれぞれの考えや収集した情報を出し合い、授業前よりも考えを広げたり深めたりすることができるような話し合いを行う。その中で、お互いの情報を整理、分類、比較するなどして新たな発見や疑問が可視化しやすくする手だてとして、必要に応じて個人やグループで思考ツールを活用している。また、子どもたちが出し合った思いや考えを教師が板書で整理、分類して、1時間の話し合いの内容が一目で振り返ることができるようにこころがけている。このようにして、子ども自身が自分の考えや思いの変容に気づきやすくするようにしている。

4 研究方法について

(1) 1人1提案(以上)の授業実践

- ・本年度の研究内容について明らかにする「提案－検討型」の研究授業を行う。
- ・学級ごとの年間学習カリキュラム(マイカリキュラム)をもとに単元を構成し、授業を行う。
- ・授業研究の事前・事後に協議会をもち、成果と課題を明確にし、単元終了後に考察を行い、まとめる。
- ・どの教科の授業も学級づくりが基盤になるという考えのもと、生活・総合以外の教科領域も現職教育の中で研修していく。他教科領域の研修を積み上げていくことで、学校全体の子どもたちの学びの質を高め、より主体的に学習できることをねらいとする。

(2) 本年度研究の方針

昨年度の実践を検証したところ、以下の二点が明らかになった。

- ・身近な学習材や地域を対象に活動に取り組んだ際に、子どもが主体的に活動したり、学級の仲間と協働して問題解決に取り組む姿が見られたこと。
- ・「子どもー子ども」、「子どもー地域の方々」と相手に「伝えたい」という目的意識をもって、定期的に発信の場を行うことで、子どもたちの発信力の向上に繋がっていったこと。

本年度は、昨年度に引き続き、学習材を「地域に関わる人・もの・こと」とし、地域に根差した生
活科・総合的な学習を意識して実践を展開していきたい。また、子ども達が学びを発信する場を定期的
に設け、相手意識のある中でそれまでの学びを子ども達の言葉によって表現させることも継続し
ていきたい。継続していくことで、子どもたちは発信の場を意識するようになり、「伝えたい!」「教
えたい!」と自ら主体的に向かっていく姿が見えてくるものと考えている。

以上のように、地域を探り、地域を語り、地域にはたらきかけることを継続していくことで、本当
の主体的な子どもの姿が見えてくると仮定し、本年度の研究を進めていくこととする。

①地域に関わる人・もの・こと

本校の位置する六十谷（園部・直川）には、豊かな自然や歴史・様々な商業施設・公共機関等、学
習材となりうる「人・もの・こと」が多くある。その一部を例として挙げる。

自然・歴史	商業施設	公共機関
<ul style="list-style-type: none"> ・千手川 ・紀の川 ・牛神天神 ・墓の谷 	<ul style="list-style-type: none"> ・オークワ ・パリジャン ・イサオ鮮魚店 ・ショップササモト 	<ul style="list-style-type: none"> ・有功東小学校 ・有功中学校 ・市立和歌山高校 ・六十谷駅
等	等	等

②表現の場の設定

子ども達が、自分達の学びを表現する場を学期に1回程度（1時間）設ける。伝える相手は、以下
のように段階的に範囲を広げていく。

- 1 学期・・・同じ学年同士で交流
- 2 学期・・・同じブロック同士で交流
- 3 学期・・・地域（家族）に向けて発信

1・2学期については、それまでの活動を子どもの言葉により表現させることに重点を置き、集会
のような発表の場とは目的が異なることに留意する。3学期は、学級・学年で創意工夫を発揮し、多
様な方法で地域（家族）へと発信していくことが考えられる。

(参考)・学習発表会

- ・ポスター提案
- ・販売活動

